

国際言語文化研究所重点プロジェクト A3

ヴァナキュラー文化研究会小特集

「コロナ禍における通訳の現状と課題」

コミュニケーションの本質と外国語使用および習得に関する洞察を求めて

趣旨と概要

ウェルズ恵子

趣旨と概要

新型コロナウイルス（COVID 19）の流行で私たちの生活が大きく変わってから、ほぼ一年経っていた 2021 年 3 月 13 日に、通訳者の土井美智子さんと小松みゆきさんをお招きして、コロナ禍における通訳の現状をご報告いただき、課題を考えるための研究会を開催した。この頃には会議の大部分がオンライン化されていて、言語使用に関する状況は一変していた。しかも、AI の発達により外国語の機械翻訳は急速度で実用化が進み、技術の高度化には目を見張るものがある。この現状で、通訳という行為およびその仕事現場は、パンデミックとテクノロジーの両方から何らかの課題を突きつけられているはずだ、というのが研究会企画の最初の動機であった。一方で、たとえ条件が変化しても、言語行為としての通訳には人間の能力や判断を必要とする核心的な部分があるのではないかと考えていた。

ヴァナキュラー文化研究会では広い関心を持って、日常的な言語と文化に関する研究を行っている。職業的な「通訳」という行為は、まさに現在使われている言語を別の言語に置き換える作業であるとともに、通訳対象となる発言内容の理解のために、通訳者が双方の文化と言語の特性や発話の状況を十分に踏まえた上で完遂される。2020 年の春先から一年間に及んでいたコロナ禍と発話現場での積極的なテクノロジー利用という二つの大きな変化の中で、通訳を「人間がすること＝文化」の視点から検討すると、いかなる洞察が得られるのかに興味があった。

この小特集にご報告をいただいた講師のうち、土井美智子さんは国内外を仕事の場とする会議通訳者である。ごく最近ではユネスコ大使団による世界遺産視察の通訳を担当し、他にもアントニオ・グテーレス国連事務総長の記者会見同時通訳、国連ハビタット第 9 回環境技術専門家会の同時通訳、スタンフォード大学ビジネススクールプログラムの逐次通訳など、重要な現場での仕事を多数なさっている。研究会では、通訳の現場に関してコロナ禍および AI の発達の現状を踏まえた観察と考えをお話いただいた。「重層的なコミュニケーション」のひだを^{かなめ}理解し、臨機応変に対応しながら、二つの異なる言語の話し手と聞き手を「つなぐ」隠れた要としての通訳者の役割が、実に具体的によくわかるご報告であった。通訳は、一つの言語をもう一つの言語へ移すだけの単純な仕事ではなく、二つの異なる言語を「つなぐ」、話し手と聞き手を「つなぐ」仕事であるとする土井さんの捉え方は、人間存在と言語との関係に思いをいたす時、大変に示唆的である。

小松みゆきさんは、京都市交響楽団の通訳を担当され、他にも各種企業の通訳実務を多数なさっている。同時に、通訳教育にも長年携わってこられた。本学文学部でも「通訳研究」の授業をご担当いただいている。これらのご経験から、日本語と外国語との通訳者を目指す人には高い日本語能力が不可欠だと主張されている。研究会では、一つの言語から別の言語に会話を移動させる時にどういった問題が起きるのか、それは「日本の英語教育」という文化とどう関わるのかを、詳しくお話しいただいた。小松さんが繰り返し強調するのは、英語使用の教育と同じくらい重要なのが「軸とする」第一言語（母語）の鍛錬だという点である。もちろん、ある程度英語ができる人に通訳養成の教育をすることと、子供たちに英語教育をすることとは根本的に異なる要素があるだろうが、豊かな経験に基づいた小松さんの報告は、バイリンガル教育や言語と思考の関係を考える上で参考になる鋭い指摘を多く含んでいる。

お二人の報告に共通するのは、話し手の語りと聞き手の立場を隅々まで尊重して言葉と向き合う誠実なプロ意識、コロナ禍を含むあらゆる不測の状況に適応しようとする意欲（土井さんの言葉で言えば「黒子」としての姿勢）、言葉と人間の関係に常にアンテナを立てていること、である。そして何よりも、報告の全体にわたって、エネルギーとユーモアが満ち溢れている。秒単位で判断を迫られ、極度の緊張を何時間も強いられることもある通訳者が、強靱なユーモアと伴走しているのだと知って、私はちょっと感動した。優れた音声言語のコミュニケーションは、人間を幸せにする「笑い」と仲がいいのだ。だから、この小特集の読者には、言語をめぐるお二人の現場報告にキラキラと光るユーモアを、合わせて楽しんでいただきたいと思う。